

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	古代ギリシアと日本との比較を通してみるカザンザキスのギリシア像：「日本旅行記」と「ペロポネソス旅行記」を中心に
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア, 27 : 1 - 30
Issue Date	2021-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051901
Right	Copyright (c) 2021 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



古代ギリシアと日本との比較を通してみる

カザンザキスのギリシア像

——「日本旅行記」と「ペロポネソス旅行記」を中心に——

福田 耕佑

京都大学文学研究科博士課程後期

テッサロニキ・アリストテリオ大学哲学部客員研究員

1. はじめに

本稿はニコス・カザンザキスが1930年代後半に執筆した「日本旅行記」¹において提示した古代ギリシア文化と日本文化の類似点と「ペロポネソス旅行記」²において提示した古代ギリシア論という二つの要素に着目し、彼の古代ギリシア像には「東方・アジア」的な要素が肯定的な形で反映されていることと、カザンザキスの古代ギリシアに対する思想や古代ギリシア像の構成には日本或いは極東での体験が活かされていることを論じたい。加えて、1910年代の後半より西欧文明に懐疑を抱き東方への関心と研究を行っていたカザンザキスが、1935年に行われた日中旅行を境に自分自身と極東或いは東洋との差異を意識し、以前は東方に対して向けられていた彼の自己同一性の探求が古代ギリシアを中心とした西方へと向けてられていったことを明らかにしたい。

本稿第二章で論じるように十九世紀後半以降の「近現代ギリシア国家の脱東方化」を目指したギリシア知識人たちの間では、「西欧世界」と「ギリシア」の間に距離を差し挟んだり「東方・アジア」的要素を「古代ギリシア」の中に見出したりすることは極めて異端的なことである。実際カザンザキスは「反西洋・反ギリシア的でアジア的なギリシア像を描いた」として自国で非難を受けており、彼の描き出した古代ギリシア観が当時のギリシアにおいて極めて独特なものであったことがうかがわれる。

初めに第二章で本稿で扱う問題の背景について記述し、続く第三章でカザンザキスによる日本と古代ギリシアの比較に関して論じる。彼のギリシア・ギ

ロシア人観探求の中で大きな役割を果たす古代ギリシアに関する考察を通して、カザンザキスの日本文化考察の内容について検討していくとともに、彼の日本体験が単なる「物見遊山」に終わったものではなく、彼の思想と文学の中で意味を有するものであったことを確認したい。最後に第四章で、当初はアジアや東方に自分を位置づけるような考えを有していたカザンザキスが、極東旅行を通して最終的には自分自身と「東方」の間に大きな距離を感じるようになり、「東方」に関する関心から「西方」的な側面への探求と執筆に向かうようになったことを論じる。

2. 問題の背景

本章では彼が『日本と中国を旅して』と「ペロポネソス旅行記」、そして『イギリス旅行記』を執筆するまでの「脱西欧化」思想の展開を整理し、彼の自己理解及びギリシア理解の変遷についてプレヴェラキスによる伝記(1984)や福田(2017)等の先行研究に基づきながら概略する。加えて1930年代後半のカザンザキスの事跡についても記述する。

2.1. カザンザキスの「脱西欧化」思想

本節では先述した先行研究に基づき、青年期に西欧中心的なギリシア観と古代ギリシア崇拝に傾倒していたカザンザキスが1935年に極東を訪れるまでには「東方」に興味を示すようになったこと、そして自身の自己理解やギリシア理解の変遷について確認したい。

元来ギリシア・ナショナリズムやニーチェの影響下にあったカザンザキスは、1906年に執筆したエッセー『世紀病』に見られるように、ギリシア古代時代を美を保った理想時代として理解し³、ギリシアが純粋に西洋世界の一部であるということに何らの検討を加えることも疑義を抱くこともなかった⁴。

西欧中心的な観点に基づいたギリシア観や自己理解に対する疑いが初めて現れるのが1917年12月5日付のアンゲラキに宛てた手紙であり、ここには心理的に西欧に距離を取って自身を「東方」に属するものとして位置付けようとする発想が見られるが、ここでの東方は主に「アラビア」に結びついていた⁵。

この発想は1920年代を通しても継続している。ロシア滞在期においてカザンザキスはルーマニア人のパナイト・イストラティや日本人の秋田雨雀と同じく自分自身も「東方」に属しているのだと表現し⁶、そして小説『トダ・ラバ』の中ではカザンザキスの投影されたクレタ生まれのギリシア人であるイェラノ

スに「アフリカ人」という表象まで与えている⁷。この時期においては自分が単にヨーロッパや「西方」のみに属するのではなく、「東方」にも属する者だというギリシア及び自己に関するアイデンティティを作品に表していた⁸。

カザンザキスが自分自身を東方やアフリカに結び付け非西欧的要素を探求していたことは当時においても一部の人には認識されていた。例えば、カザンザキスが西欧において紹介される契機の一つとなった文芸雑誌「メルキュール・ド・フランス」1930年4月15日号では、「出目的にはクレタ人であるカザンザキス氏は、まさにそれ故に自分自身を少々アフリカ人だと感じている。かように、彼は情熱的で官能的な形象【*les images ardents et sensuelles*】を愛しているのだ」と指摘されている⁹。

上述の自己意識は本稿で扱う極東期でも『日中旅行記』第六章「日本人基督者」において見られる。日本へと向かう船の上で「ヨーロッパ人には日本の歩む道程は理解できない」と日本人から言われたカザンザキスは、「私はヨーロッパ人ではありませんよ。私はヨーロッパとアジアの間に生まれました。私には分かります」と答えている¹⁰。

確かに日本は「東方」に属する国であるが、ここでの「東方」はギリシアやロシアが西欧に対して有する「東方」とは違った「東方」であろう。だがカザンザキスは「アジア」という共通の「東方」的要素を引き合いに出すとともに、彼の思想的著『禁欲』や「日本旅行記」に現れる「心」の理解を通して、思想的に日本を「東方」に位置する国として位置づけた¹¹。前段落の引用で見たようにカザンザキスは自身が「西方」のみに属するという自己理解を拒否して「東方」にも属しているのだと強調しており、極東旅行の意義を彼が定義する「東方」探求の中に組み込んでいる。そして次章以下で見ると、カザンザキスによるギリシア理解も単に「西方」として位置付けられるのではなく、「東方」的な要素を含むものとして理解され「東方」に属する日本と比較されていくことになる。

2.2. 古代ギリシアと日本を比定する意味

カザンザキスのソヴィエト・ロシア経験を扱ったパツィスの先行研究において、このようなカザンザキスの「脱西欧化」の思想は「故郷嫌悪」(Οικοφοβία)或いは「祖国嫌悪」(Πατροφοβία)と表現される¹²。この「故郷嫌悪」の反映された謂わばギリシアの「東方化」は以下に見ていくように、文化的な潮流的にも当時の知識人たちから受け入れられがたいものであった。

近現代ギリシア・ナショナリズムや十九世紀後半以降の軍事拡張政策のバックボーンとなった「偉大な理想」(Μεγάλη Ιδέα) に初めて言及することとなったイオアンニス・コレティス¹³による 1844 年の演説では、現代のギリシアが古代ギリシアの末裔であり、西方に位置付けられる自分たちが東方を「啓蒙」するという意識であった¹⁴。十九世紀中葉の思想家たちはギリシアを先進的なヨーロッパ世界に所属する国家だとみなし¹⁵、「西洋化」のイデオロギーの中で「東方的」と思われたもの全てに価値の劣ったものというレッテルを貼り付けた。これは音楽の様式から街の建築、そして言語や人々の衣服の習慣にまで及び、あらゆる「東方的」なものの「西方的」なものへの置き換え、或いは変革が推し進められることになった¹⁶。

しかしロマン主義と反啓蒙主義の潮流の中でギリシアが「西方と東方の両方に属している」という事実を肯定的に捉える思想的潮流が見られ、ギリシアの「東方」性に向き合おうとする思想家も現れ、この中でギリシアにとって「好ましい『東方』」と「好ましくない『東方』」が区別されていくことになる¹⁷。ポリティスは、このような知的動向の中にはギリシアの「東方」から「アジア」のニュアンスを分離して排除しようとする知的努力があったことを指摘している¹⁸。このような例えば「アジア的野蛮」という言葉に代表されるような「アジア」という言葉に否定的な意味を込める発想は実際ギリシアにおいて、例えばイオアンニス・フィリモン¹⁹の『ギリシア革命に関する試論』第三巻にも見られ、「ヘレニズム」(Ελληνισμός)と「トルキズム」(Τουρκισμός)という用語の対立に現れている。フィリモンは、トルコ主義(トルキズム)を「人の姿をした野蛮と退化」であり、ヘレニズムを「人の姿をした自由・平等・進歩思想」と表現した²⁰。このような時代背景の中、カザンザキスに多大な影響を与えたイオン・ドラグミスは、トルコやアジアを直接的に野蛮で劣った存在だという表現はしなくとも、オスマン朝、或いはトルコを含む東方からのギリシアへの精神文化への影響を否定した。そして、もしギリシアにおいてトルコ人による支配がなければ、新しい文化を発展させられたはずだと述べるなど²¹、西方・ギリシア文明とは混じりようのない異質なもので精神的に劣ったものだという偏見を持っていた。上述の背景に見られるように、「東方」或いは「アジア」という言葉には否定的な意味合いが付与され、カザンザキスに先行する知識人たちによってギリシアと関連させることを忌避する雰囲気醸成されていた。

ギリシア外の外国の思想・文化史的においても、ドイツの新人文主義形成に重要な役割を果たしたヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンは古代ギリシアの

イメージに関して「高貴な単純さ【eine edle Einfalt】と静かな偉大さ【eine stille Größe】」や真善美の体現としての「アポロンのギリシア像」を唱え²²、「自然の模倣」という感性で捉えられる感覚的な美ではなくギリシアという「古代の模倣」を通して理性で捉える「理想美」や「普遍的な美の概念」を求めた²³。彼の理解では、この超自然的な美の理想はギリシア芸術の「人体の表象」に現れ、比例定数などの数学的秩序を欠いたアジアやアフリカの彫刻は「正しい知識」を欠いているが故に「正しい美」の理念を逸している²⁴。今橋によると、このような姿勢は真の芸術を古代ギリシアに見たヘーゲルにも見られ、ヴィンケルマンの古代ギリシア芸術観が受け継がれているとしている²⁵。またフリードリッヒ・アウグスト・ヴォルフは古代ギリシアに関して、ギリシア文化が独創的で何ら外来のものを付け足すことがなかったことと²⁶、オリエン文明に対して「同質なギリシア・ローマ文化」²⁷が優越していることを主張した²⁸。

このような傾向はニーチェにも見られ、『人間的、あまりに人間的』上巻第三章百十四節においてキリスト教がアジア的で野蛮であって非ギリシア的であると批判しており、ここには「アジア＝野蛮」と「ギリシア≠アジア」という枠組みが見られもする²⁹。また同書上巻第八章四百七十五節における「善きヨーロッパ人」(guten Europäer)に関する記述では、ヨーロッパ共通の基底は古代ギリシア文化であり、ギリシア・ヨーロッパの共通性とその外部であるオリエンとその間の断絶を強調している³⁰。『悲劇の誕生』においても、小アジアに起源を有する「ディオニソスのなもの」は、古代ギリシア人が小アジアからの影響でこれが自分自身の内にあることを悟ったものであり、小アジアの非ギリシア人たちから外来のものとして輸入されたものではない³¹。ここでも、「ディオニソスのギリシア人」(dionysischen Griechen)と「ディオニソスの野蛮人」(dionysischen Barbaren)という対立でギリシアの東方・ディオニソスのものとはアジア・野蛮なものは交わらないものとして厳格に区別されている³²。

しかしニーチェの古代ギリシア観は複雑であり、田邊はニーチェが古代ギリシアの根底にはアジア的なものがあり、これら非ギリシア的なものをギリシア化したのだというギリシア理解を有していたことも指摘している³³。しかしいずれにせよニーチェは「ヨーロッパ精神」は「ヨーロッパを東洋化した」ヘブライズムの継承ではなく所謂ヘレニズムの継承であると考えており、ヨーロッパとアジアの断絶に固執していたことは明確だと言えよう³⁴。

こうした歴史的背景にも関わらず、カザンザキスは次章以下で見ていくよう

にアジアに属する日本と古代ギリシアの大胆で新奇な文化比定を積極的に行っていく。確かにカザンザキスは彼の『禁欲』の思想やキリスト論によってたびたび正教会や政府から反宗教的との断罪を受けたが故にこれらが突出して有名であり、彼のギリシア観に関してはほとんど話題になることはなかったが、彼のギリシア観に対しては同時代の人物でヴァシリオス・ラウルダス³⁵が批判を加えている。ブーンとカラリスによると、ラウルダスはカザンザキスの詩が古代ギリシアの伝統にも現代ギリシアの伝統にも属しておらず、加えて『エロトクリトス』に代表されるクレタ文学にも反しているという名目で批判した³⁶。この批判に加えて、更にラウルダスはカザンザキスの文学的な世界観に対しそれがアジア的な世界観を有してさえおり、ギリシアと「東方」(Ανατολή)の合成だと批判している³⁷。前節でみたように、西欧の文化的な祖としてのギリシア、東方に対して精神文化的に優位に立つギリシアというイメージが極めて重要視されていたことを確認したが、この文脈の中でカザンザキスはこのイメージを損なうギリシア観を描いた者として批判されているのである。

このラウルダスの批判にカザンザキスが弁明することもなく、またラウルダスもこのギリシアと「東方」或いは「アジア化」に関する問題を掘り下げず、カザンザキスのギリシア観の有する「東方性」或いは「アジア性」の重層性に関する議論が深められることもなかった。

だがカザンザキスによる「日本旅行記」と「ペロポネソス旅行記」での日本と古代ギリシアを比較し、東方的な要素を取り込みながら古代ギリシア像を描いていく行為には、いわゆる「故郷嫌悪」が反映されているが³⁸、彼の独特な古代ギリシア像を描こうとする努力があったわけでもあり、この古代ギリシア像を描くに際しカザンザキスが抱いていた日本像が一定の役割を果たしていたことを三章で解明していきたい。まずはその内容の検討に先立って、続く二節と三節ではこの時期の彼の動向を整理しておこう。

2.3. 三旅行記執筆期の動向

本節では「日本旅行記」と「ペロポネソス旅行記」、そして『イギリス旅行記』を執筆した時期の動向をプレヴェラキスの伝記及びジャンニオ・リュストの先行研究に基づいて記す。尚、日本を訪れた1935年から1936年の動向に関しては福田(2020)を参照されたい。

カザンザキスは極東から帰国し『石庭』(Jardin des Rochers)を執筆した後、1936年10月から11月にかけて内戦状態にあったスペインに特派員として赴い

てウナムーノやフランコへの取材を敢行し³⁹、その動向をカティメリニ紙に執筆している⁴⁰。帰国後はエギナ島で執筆に専念し、1937年の9月4日から19日までペロポネソス半島を旅行し、パトラ、オリンピア、ヴァッセス、ミストラス、モネンヴァシア、スパルティ、アルゴス、ミキネスを周遊している⁴¹。この時の体験をカティメリニ紙に11月7日から12月21日付で発表している⁴²。ここでの記事が本稿で取り上げる「ペロポネソス旅行記」に書籍として収録されることになる⁴³。

1938年は叙事詩『オディッシア』の完成に向けた執筆に明け暮れ、10月に『日本と中国を旅して』と共に出版している。続く1939年もエギナ島の自宅で執筆に専念するが、7月から11月にかけてイギリス旅行を行っており⁴⁴、ロンドンやリヴァプールを訪れ、12月にエギナの自宅に戻っている⁴⁵。このイギリス旅行においてストラトフォード・オン・アヴロンに滞在している間に戯曲『背教者ユリアノス』を執筆しており、1940年にはエギナ島で第二次世界大戦に巻き込まれていくことになる。

3. 古代ギリシアと日本の比較——カザンザキスが見ようとしたギリシア

本章では主に「日本旅行記」と「ペロポネソス旅行記」に見られる古代ギリシア像と、「日本旅行記」に描かれた日本像との比較について論じたい。

日本と古代ギリシアが地理的に隔たっており、文明的にも直接の相互影響が見られなかったのは自明であるが、それでもカザンザキスは「日本旅行記」において「この世界に、その最も輝かしい瞬間において古代ギリシアがどのようなであったかのを日本ほど思い起こさせてくれる国はない」と述べ⁴⁶、また「他のどの国も日本ほどギリシアに似ていない」と書いている⁴⁷。このようにカザンザキスは日本とギリシアの類似について述べているのだが、以下の節ではカザンザキスが「日本旅行記」においてどのような点に着目して日本とギリシアの類似を思い描いていたのかを明らかにしたい。

3.1. カザンザキスの古代ギリシア像の基礎的特徴

カザンザキスは「日本旅行記」と「ペロポネソス旅行記」において、古代ギリシアの特徴を具体的に列挙している。具体的な検討は次項以降で行うが、本節ではまずこれらの項目を確認し整理したい。

まず「日本旅行記」の「日本に別れを告げて」の章の中でカザンザキスが直接日本と古代ギリシアの共通の特徴として指摘するのは、(1)手工芸品、(2)笑

いと悲劇、(3)肉体的修道、(4)同化力であり⁴⁸、そして同書の他の箇所でも(5)女性と恋愛、(6)母体に根を持たない「個」の否定⁴⁹を挙げている。

次に「ペロポネソス旅行記」において古代ギリシアの特徴を記述している箇所を引用する。

こうしてアルゴスの平地を見ながらコリントへと上って、私の理性の中に古代の先祖の主な特質を並べ立てる。生への愛、穏やかな死との対面、肉体の修練、理性と肉体の調和、自由への愛、他のより良い世界を羨望することなく大地に喜ばしく根付くこと⁵⁰。

整理すると、(i)生への愛と穏やかな死との対面、(ii)肉体の修練、(iii)理性と肉体の調和、(iv)自由への愛、(v)彼岸を求めず大地に根付くことの五点である。

この中で「日本旅行記」と「ペロポネソス旅行記」の中で共通しているのは(3)と(ii)の「肉体的修道」及び「肉体の修練」であり、言葉の上で同じではないが実質的に共通するのは(5)「女性と恋愛」と(i)「生への愛と穏やかな死との対面」である。次項以下では実際にこれらの項目を整理して分析し、カザンザキスの日本と古代ギリシアの比較を見ていこう。

3.2.1. 母体に根を持たない「個」の否定

まず本項では「日本旅行記」に見られた日本と古代ギリシアに共通の「母体に根を持たない『個』の否定」について論じる。『トダ・ラバ』においてカザンザキスは東方の特徴が「全への合一」であるのに対し、「個」は西方の特徴だとしている⁵¹。まずカザンザキスが「日本旅行記」の中で描いた日本は、彼の思想的名著『禁欲』の思想に沿う形で個人は生き方においてもその芸術的創造においても民族に属すものとして理解されており⁵²、民族という根差すべき母体から離れてしまった個人主義は退けられるべきものとして描かれていた⁵³。

「ペロポネソス旅行記」によると、カザンザキスは「古代ギリシアは匂いも手垢もついていないような、超自然的なものではなかった。深く大地に根を下ろし、泥を食べて花を咲かせる木のようなもの」であり⁵⁴、「芸術とは個人的なものではなく全体に属するものであり、芸術家はその邦【πολιτείας】と民族【ράτσας】の代表であり、この全体の生きていた偉大な瞬間を不死にするとい

う目標を有していた」と記述している⁵⁵。カザンザキスにとって古代ギリシアの創造は時代背景や社会環境とは無関係な特定の人物、或いは孤立した天才の手になるものでもなければ、個人の心情や事情、またその勲功のみを表現するものでもなかった。それは確かに汎人類的な側面を持つものではあるが⁵⁶、何よりもまず自分たちが生きる時代と場所、そして自分たちがよって立つ文化や伝統に属するものであり且つこれを表現するものである。そして古代ギリシア人たちが自分たちの間で共通財として、そして先祖たちとの共通性を担保してくれるものとして有しているのがギリシアの風景である⁵⁷。この風景は常に同じであり続け、ギリシア民族に一貫性を与えるものであり続けたのだとカザンザキスは論じている⁵⁸。

一方カザンザキスは、ギリシアが退けられるべき個人主義(ατομικισμός)に陥ってしまったのはペロポネソス戦争以降のことであり、「人間に到達可能な頂点を示した均衡」のパルテノンの時代から混沌の時代になってしまった、と述べている⁵⁹。この混沌の時代は「不信心で現実主義的な、超人間的な理想もない大口叩きのヘレニズム時代」(ελληνιστική)であり、ギリシア人は古代時代のポリスの擁護者たる市民ではなくって祖国への信頼を失ってしまい、そうしてこのヘレニズム時代のギリシアが東方(ανατολίτικη)になっていったのだと理解している⁶⁰。先行研究においてカラリスはニーチェの述語を用いつつ、この個人主義に陥りポリス或いはギリシアへの根を失ってしまったこの時代を「アレクサンドリア文化時代」と呼び、個々人が「自分が世界の中心である」と宣言することにより個人と社会が分断され、ギリシアの徳である均衡及び調和を失った時代だったと論じている⁶¹。このような「個人」(το άτομο)は『禁欲』において自分だけが存在し、全ては自分が作りだした表象であると述べる独我論的な「理性」であり⁶²、『禁欲』において最初に乗り越えられるべきものであった。カザンザキスにとってこのような「個人」は混沌を象徴するものであり、「日本旅行記」では「我々白人は(中略)個という地獄【κόλαση της ατομικότητα】の中で彷徨い」、「何も信じず、惨めに生きて、永遠に死ぬのだ」と記述している⁶³。そしてこの「個人」は「個人と社会の均衡の取れたギリシアの理想時代」と文化を象徴する「自分自身」(ο εαυτός)とは全く異なるものであり、カザンザキスは古代のギリシアをこのあるべき「自分自身」から「個人」に墮してしまった歴史として描く⁶⁴。ここまで見てきたように、カザンザキスは日本においても古代ギリシアにおいても母体或いは民族に根を持たない「個」を否定している。

3.2.2. 「同化力」

「日本旅行記」を通してカザンザキスは日本とギリシアに共通する要素として「同化力」の高さを挙げている。カザンザキスに先行し彼に思想的に影響を与えたギリシア人思想家たちの中に古くはプラトンがおり⁶⁵、同時代人にはペリクリス・ヤンプロス⁶⁶や先述のイオン・ドラグミスがいる。ヤンプロスは他文明及び他文化を「ギリシア化」する意味でのギリシアの「同化力」の高さを指摘し、ドラグミスは他文化がギリシア化される原動力としてギリシア文化の優越性を指摘した。確かにカザンザキスも「日本旅行記」の中で古代ギリシアがエジプトや東方或いはオリエント(Ανατολή)から宗教や芸術など文明の第一要素を受けこれを「ギリシア化」して同化したことを論じている⁶⁷。そしてこのギリシアの他文化を同化させる力は、古代のギリシアのみならずヤンプロスやドラグミスの指摘するように⁶⁸、中世から現代にかけてのギリシアも同じ特質を有するものだとして理解している⁶⁹。

第二章第二節で確認した西洋の文化的な祖先であり、東方・オリエント世界からは文化的な影響を受けることがなかったと理解されていた古代ギリシア観に対し、カザンザキスは古代ギリシアの起源を「古代ギリシアの民衆たちは、ヨーロッパと東方の古い人種と新しい人種【φυλές】の様々なものの混合」であり、周囲の民族や文化を同化してきたと理解している⁷⁰。そして彼は、古代ギリシアが歴史上卓越した時代であったことは無論認めつつも、純粋な存在ではなく多民族の影響を受け混合しているものだとし、理想化された古代ギリシアの様々な祝祭なども現代のギリシアの「どんちゃん騒ぎ」と変わるものではなく、声と喧嘩そして商売に満ち、馬や豚などの家畜の呻きに満たされていた、と述べている⁷¹。そして理想とされる古代ギリシアの白さも作り物であって振る舞いや倫理、またその魂においても野蛮なものがあつたとしている⁷²。このように、カザンザキスはヴィンケルマンやヴォルフ等とは異なり古代ギリシアをオリエント世界或いは東方から切り離して理解せず、またヴォルフやドラグミスのように古代ギリシア世界が劣ったアジア・東方世界から文化的な影響を受けることはないといった考え方を排斥している。

日本の「同化」(assimilative)に関しては、カザンザキスはその作品を精読したことが明らかであるラフカディオ・ハーンも指摘しているように⁷³、カザンザキスは彼の古代ギリシアの同化とその起源に関する理解と同じく、日本もインドや中国、そして朝鮮から宗教や文明を受容して同化し、日本独自の文化を

形成したと記述している⁷⁴。

カザンザキスは日本の特徴の一つはこの「同化力」或いは「日本化」にあると考えている。「日本旅行記」では日本に入港する前に日本人キリスト教徒のカバヤマ・サンの口から、日本の伝統的な宗教とは異なるキリスト教を彼が受容できた理由として日本の魂の特徴が語られる。その特徴は、日本は外国の思想を受容するが、単に影響を受けるだけでなく従来日本の思想と調和させて同化してしまう、というものである⁷⁵。この主題は「日本旅行記」及び『石庭』の中で繰り返し語られる。例えば「奈良」の章においても「日本人の魂は、いつも何か女性的なものを持ち、外国の種に憧れ、受け入れることさえも切望している。次第に日本人の心の内で、取り込みと実り豊かな同化が始まった。役に立たないものは追い出し、同化され得るものだけを取り入れた」と論じている⁷⁶。そして、『石庭』ではクゲの口を通して「ひとたび同化【assimilées】すれば、日本の伝統の中にもう溶け出して出て行ってしまふことのないように統合して、全てを均質にしてしまふのです」と語らせている⁷⁷。加えて、この日本の外来物の同化を「日本の奇跡によって同化し【assimilions】で「民族主義【nationalisme】の中に取り込」んでしまう「俳諧【haikai】」とさえ呼んでいる⁷⁸。このように、カザンザキスにとって日本の「同化」及び「日本化」の力は日本の大きな特徴の一つであり、外来の文化を吸収しつつ自国独自のものに昇華させたという点が、日本と古代ギリシアに共通しているといえよう。

3.2.3. 手工芸品

カザンザキスが次にギリシアと日本に共通しているものとして挙げているのは両者が古代から有している「手工芸品」についてである。同じく「日本旅行記」においてカザンザキスは以下のように述べている。

古代ギリシアと同じように、ここでも古代日本においても、今でも生きているのだが、人間の手より出る、日常の生活の中で使われる極めて小さなものでも、それは愛と喜びによって作られた工芸作品【ἔργο τέχνης】である。全ては美と素朴さ、そして喜びを欲求する、喜ばしい有能な手から出るのが、日本人はこれをたった一言「渋い」【σιμπούι】と呼んでいる。

日々の生活の中の美しさ。他にも類似点はある。

両民衆とも宗教に朗らかな見方というものを与え、神を人間との思いやりのある接触の中に定立した。両民衆とも同じ素朴さと喜びを、衣装と食事、そして住居の中に有しているのだ⁷⁹。

もちろん、カザンザキスは日本の芸術に関しても狩野派の作品や庭園などを論じているが⁸⁰、とりたててギリシアとの共通性を論じたり比較を行ったりはしていない。カザンザキスとは逆に『お菊さん』を執筆し後世の日本像に対し絶大な影響を与えたピエール・ロティは日本の美術の質を高く評価しつつも「我々の、ギリシアやラテン、或いはアラビアの古芸術に由来するものは何もなく」、「全てが私たちに極めて不可思議」であって「地球の私たちの側とは何の交流もない何か隣の惑星からやってきた」かのようなであると述べ、西洋文化との異質性、或いは断絶を強調している⁸¹。またカザンザキスは日本の文化の女性性に触れているが⁸²、対して新渡戸は『武士道』の中でヴィンケルマンを引きつつ古代ギリシア文芸術の男性性を指摘していた⁸³。このように、カザンザキスが日本と古代ギリシアの美術品、或いは工芸品に見てとった近似性は先行作家たちに見当たらない。

カザンザキスが「日本旅行記」において美学的に古代ギリシアの彫刻などの芸術を論じることはない。そして「古代ギリシアと同じように」と書いているものの、他の著作においても古代ギリシアの民衆の生を論じず、また美術作品とは異質な生活の中の美を具体的に論じることも管見の限りない。故に特に古代ギリシアの民衆の生活や手工芸品、及び道具のどの点にどのような美が表れるのかという描写や論証は見られない。

確かに古代ギリシアと日本の工芸品を比較するという視点は当時のギリシアの知識人たちを見るとカザンザキスに独特な視点だと言えるだろう。だが、古代ギリシアの美を論じるに際し、古代ギリシア彫刻といった古典的な芸術作品などのいわゆる「古典ギリシアの美」を象徴するような対象ではなく、従来知識人たちが古代ギリシアとその美を称揚するに際し看過しがちな当時の「民衆の生」を取り上げている点も注目に値する。民衆に着目するという点はこの極東期に先行するロシア期にも見られたが⁸⁴、極東期においても十分に継続されているものである。

3.2.4. 「悲劇」と「笑い」

カザンザキスは日本と古代ギリシアの悲劇に関して、「ディオニソスの花祭と花見という同じような自然を崇拝する祭り、そして同じ根から出た踊りがあり、そして同じ神聖な果実から悲劇を取り出したのだ」と論じている⁸⁵。より具体的には、「日本旅行記」の「日本の悲劇が生まれたところ」の章において、日本の悲劇「能」の悲劇作家として、「日本のソフォクレスでありアイスキュロスである観阿弥・世阿弥」の名前を挙げている⁸⁶。この日本と古代ギリシアの「悲喜劇」には特に古代スパルタと日本に共通する「笑い」⁸⁷、そしてロシア期においても『その男ゾルバ』においても哲学的な意味を与えられる「踊り」が含まれている⁸⁸。しかし同じギリシアであっても「ペロポニソス旅行記」の中で、現代のギリシア人には古代人に見られた笑いや微笑みは見られないと述べており、古代ギリシア時代の笑い、悲劇性が現代では失われていると指摘している⁸⁹。特に「笑い」に関してはカザンザキスもその翻訳を出版したアンリ・ベルクソンの『笑い』や、また悲劇に関しては同じくカザンザキスとその翻訳を出版し、自身の博士論文でも取り上げたニーチェの『悲劇の誕生』との関係を論じねばならないが、本稿では問題を指摘するに留め他稿で改めて論じたい。

3.2.5. 「女性」と「恋愛」そして現世の肯定

ここでカザンザキスによる日本と古代ギリシアの類似点として指摘するのは、彼の「女性観」及び「恋愛観」である。たとえばカザンザキスに先行するハーンも東洋の魂(that Oriental soul)の自然と生への喜ばしい愛は古代ギリシア民族(the old Greek race)と奇妙な類似があると述べている⁹⁰。カザンザキスは「日本旅行記」において京都の芸者や街の女性たちなどの描写を多々行っているが、特に集中的に描いているのは東京滞在中のことを描いた「日本人女性」の章の「吉原と玉乃井」という項と「芸者」という項である。本稿はカザンザキスの女性論やフェミニズムといったこれまで十分に論じられた分野を論じるものではないので、ここでのカザンザキスの日本人女性観については論じず、身体的快樂の肯定に結びついた非キリスト教的現世肯定という観点からカザンザキスの言説を分析したい⁹¹。

まず「吉原と玉乃井」⁹²の項でカザンザキスは「日本人たちはキリスト教的な身体への呪いを経ておらず、彼らにとってつかの間の快樂は罪ではないの

だ」と述べている⁹³。次に「芸者」の項で、「ここで(東京の料亭)あなたは古代ギリシアの恋愛に対する理解の一女に喜びを与え、女から喜びをもらうということは死に至る罪ではない一雰囲気を感じたことだろう」と記述している⁹⁴。カザンザキスにとって、特に恋愛と女性というテーマは小説家として処女作となる『蛇と百合』(1906)から晩年の『最後の誘惑』(1951)まで一貫して見られる重要なテーマである。

「ペロポネソス旅行記」において古代ギリシアの女性や古代ギリシア人の恋愛観、或いは上記で見た「古代ギリシアの恋愛に対する理解一女に喜びを与え、女から喜びをもらうということ」について細かい描写がなされることはなかった。カザンザキスは「日本旅行記」で恋愛と生の喜びの肯定を提示したが、この思考は「日本人たちはキリスト教的な身体への呪いを経おらず」と書いているようにキリスト教と対比され、ニーチェ哲学に大きな影響を受け1906年に執筆した最初期のエッセー『世紀病』以来継続した見方であり、ここでも「イエスの到来まで人間は生とこの世の善を尊重し」、「美しく健全で、若くて豊かでいたい」と記述している⁹⁵。逆に「ペロポネソス旅行記」においてカザンザキスは「ビザンツ人或いは東方人」を神権政治、封建制、生の嫌悪、虚無、厭世主義、神秘主義、大地の軽蔑と永遠の天への憧憬として列挙している⁹⁶。このように、現在のギリシアにつながるキリスト教化した中世ギリシアの「ビザンツ人或いは東方人」のこれら列挙された特徴は、日本の特徴と、また同じギリシアにもかかわらず古代ギリシアの特徴と対比される形で書かれている。

残念ながら「ペロポネソス旅行記」の中で古代ギリシア人の具体的な死に対する態度や思想に関するカザンザキスの記述は見られないが、カザンザキスの日本人の死に関する議論は「日本旅行記」及び『石庭』でなされており、特に『石庭』では、死は西欧の発明であり、不死を信じる日本人が死を恐れることはない」と記述しており⁹⁷、『禁欲』や日本の武士道に結びつける形で日本の死生観を捉えている⁹⁸。本項では、日本と古代ギリシアにおける女性を通した身体性と現世の肯定という議論を、ステレオタイプ的ではあるがキリスト教と対比させる形でカザンザキスが想定していることを確認し、併せてこの観点における古代ギリシアと中世以降のギリシアが断絶しているとみなしていることについても確認するに留めておく。

3.2.6. 肉体的修道

最後に、カザンザキスが日本と古代ギリシアに共通な要素として挙げている重要な点が肉体の修養について述べる。新渡戸も『武士道』の中で、武士には「鍛錬【exercise】と模範【example】によって訓練【trained】されうる若者の精神【mind】」という発想があり⁹⁹、武士が「行動の人」(a man of action)であり¹⁰⁰、教育において武術や馬術を兵法や文学、そして歴史などと共に学んでいたと記述している¹⁰¹。この肉体と人格及び精神の結びつきは、今回の極東旅行、及び「故郷嫌悪」・「東方探求」の文脈において、物質を欠き抽象的過ぎる理性に重きを置く「西方」から距離を置くというカザンザキスの目的に合致していた。そして「日本旅行記」でカザンザキスは次のように書いている。

二つの民衆とも【日本と古代ギリシア】肉体的修練【σωματική άσκηση】に靈的な目的【πνευματικό σκοπό】を置こうと努めている。日本人は弓を使った修練を崇拜する。なぜか？日本の体術家【γυμναστής】が以下のように私にまっとうな理由を説明してくれた。1) 弓術が思考を定めてくれる。あなたは習慣的に矢を射る前に考えるようになる。そしてあなたが偉大な倫理的な生活を獲得したいのであれば、この習慣は日常生活で必要不可欠である。2) 弓術は服従【πειθαρχία】を強調する。あなたは冷静さを保つ習慣が身に付くが、これは人間の生の中で計り知れない価値を有している。3) 弓術はあなたの各々の動きを喜びの中で完成させることを教えてくれる¹⁰²。

また古代ギリシアにおける肉体の修練という観点については、「ペロポネソス旅行記」から引用すると、

ギリシア人は決して芸術のための芸術に従事したことはなかった。常に美とは生に仕えるという目的を有していた。古代人たちは均衡が取れて健全な理性を受け入れるために、美しく強い肉体を欲していたのだ。そして更に一最上の目的として一都市を守ることができるように。

ギリシア人にとって鍛錬は都市での公共の生にとって欠くべからざ

るものであった。完全なる市民とは鍛錬と格闘を通して、肉体を仕えさせて、より強くて調和した、つまり美しい肉体を創造して人種を擁護する覚悟のできている者のことであった¹⁰³。

と述べており、加えて「あなたは古典時代の像を見ればただちに格闘技で戦っている男性が自由人なのか、奴隷なのか理解するだろう。彼の肉体がそれを明らかにしてくれる。選手の美しい肉体、静寂な静止、苦痛の絶対服従。これらは自由な人間の長である」と記しており¹⁰⁴、極東期を通して描かれた肉体の修練の重要性が継続されている¹⁰⁵。

また 1939 年の『イギリス旅行記』においても日本の侍とイギリスの紳士 (gentleman) を比較しつつ¹⁰⁶、イートン校やオックスフォード大学、そしてケンブリッジ大学における、ギリシア古典とスポーツや身体の鍛錬を重視する教育を肯定的に描いている¹⁰⁷。特にイートン校における教育では、個人ではなく団体スポーツを重視し、このスポーツ教育を通して肉体を鍛錬することと集団に対する個人の犠牲の重要性を学ぶことになる旨を指摘している¹⁰⁸。『日本と中国を旅して』の「序文」で見た極東旅行の目的は「脱西欧化」と過度な合理主義と抽象性を脱して『禁欲』で描かれた「心」が対象とする肉体性と感覚性を再獲得することであったが¹⁰⁹、カザンザキスは古典ギリシア世界と古典ギリシア教育の根付いたイギリスでの教育、そして日本の武士道や弓術の中に共通するものを見出していた。

ここまで本章ではカザンザキスが提示した日本と古代ギリシアの五つの類似点について論じた。彼は日本と古代ギリシアが似ていることに作品の中で言及していたが、そもそもラウルダスによるカザンザキスのギリシア観に対する非難や当時の時代背景に見られたように古代ギリシアと東方は切り離されてしかるべきものであり、当時ギリシア人の間で十分に知られていたとは言い難い日本文化と古代ギリシア文化の比定は、ギリシアの知識人たちの中で見るとカザンザキ스에極めて独特な視点だったと言っても過言ではないだろう。特に本項の「肉体の修練」や福田(2020)で見たように、彼の日本理解は思想的な主著『禁欲』の思想に適合する形で行われており、『禁欲』の思想の枠組みの中で日本に関する思索と考察が古代ギリシアに対する考察や思索と交錯しあい相互に影響を与え合っていた点もカザンザキス思想を論じる上で極めて重要な視点である。

4. 「東方」との距離感の芽生えと「西方」への回帰

前章までは日本との類似点を通じて見られたカザンザキスの古代ギリシア像を見てきたが、本章では「日本旅行記」と『石庭』に見られるカザンザキスの極東との心理的な隔たりの生起と西方への回帰について確認していきたい。

4.1. 「日本旅行記」における描写

まずここまでで「日本旅行記」において日本と古代ギリシアに対し基本的には近似性を認めていたことを確認した。そして本稿第二章第一稿で確認したように、『日中旅行記』第六章「日本人基督者」において日本に向かう船の中で自分が単なるヨーロッパ人ではなく、ヨーロッパとアジアの間に生まれたギリシア人であると述べていた通り、西欧への忌避という文脈にいたこともあり基本的に極東地域に親しみをも感じていたのであった。

このような傾向に変化が見られるのが日本を経って中国に向かう前の第二十二章「日本の工芸」の章においてであり、「確かに信心深い日本人であれば私よりももっと深くこの感動を感じるのであろう。そしてこの感動がその全人生に律動を与えている。私は窮屈な論理【λογική】と狡賢い商人に満ちた祖国に帰るのだ。だが日本人はここに留まるだろう」と記している¹¹⁰。また第二十三章「日本人女性」第二項「芸者」において、日本人の微笑みという仮面の下の本当の「日本の顔」が掴めないことにいら立ちを覚える描写を記しもあり¹¹¹、東京で日々を過ごし日本を離れる日が近づくにつれ、カザンザキスは日本に感じていた近さよりもヨーロッパ・西方への近さを感じ始め、当初は日本を理解できると発言していたが、自分たちの間における理解の不可能性について意識している描写が見られるようになる。

4.2. 『石庭』における描写

前項で見たようにカザンザキスは「日本旅行記」において少しずつ極東や日本との距離感を感じ始めていたが、本項ではギリシア帰国後にギリシア人に向けてではなくヨーロッパの読者に向けてフランス語で書かれた『石庭』におけるカザンザキスの極東に対する距離感を見ていきたい。まずこの作品を執筆していた1936年の5月にカザンザキスがブレヴェラキスに宛てた手紙の中で、彼はこの作品が「ヨーロッパの魂が極東の魅惑的で危険な、英雄的な魂との接触によって我が身の一瞬を求めるような」小説であると書いている¹¹²。そし

てカザンザキスの人格が投影された主人公は最初の嫌悪感を乗り越えて無数の黄色人種(τη αναρίθμητη φυλή των Κίτρινων)の人々を理解し愛することができるようになっていくと述べており¹¹³、そもそも執筆段階からヨーロッパと極東の間の差が深く意識されている。では実際に『石庭』本文を見ていこう。

日本に向かう船の中の出来事を描く『石庭』第二章において、本節で後述するポーランド人バイオリニストに「日本人の男や女たちと話をして何か楽しいことでもあるのですか？」と尋ねられた主人公は、「彼らが好きなのですよ」、「私たちに似ていないので好きなのですよ。白い顔はもうたくさんです」と答えている¹¹⁴。このように日本との距離感という点では「日本旅行記」と真逆の展開で始まっている。また本文の中で人種(race)に絡めた話で白色人種と黄色人種が異なる存在で、黄色人種の雑踏に身を馴染ませることができず、兄弟として認めることを拒んでしまっていたこと¹¹⁵、そして初めて黄色人種(race jaune)に接触した時に生理的嫌悪感があったことを告白しており¹¹⁶、当初から心理的に隔絶があったことがより一層強調されている。

また同章の同じく日本に向かう船中で、この主人公は日本人女性の友人で日本軍のスパイのヨシロと会話を交わす。この中では、「日本旅行記」とは違って変わり、ヨシロは「ああ、白人たち!」、「白人たちに青白い思想。自由、平等、博愛ですって...キリスト教が作り出したキマイラよ...植物的美德だわ!」と述べ、加えて当時の日中の国際情勢の故に「中国は私たちのものよ! 中国に手出しする者は用心することね!」と発言しており¹¹⁷、ここに穏やかで相互理解を求める雰囲気は一切見られない。加えて、このヨシロの次に登場する先述のポーランド人バイオリニストの描写が「日本旅行記」と『石庭』で異なっているのが極めて興味深い。ポーランド人バイオリニストという属性を持つ人物は「日本旅行記」の「日本人基督者」の章に登場するも特に印象的な役割も果たさず日本について述べることもない¹¹⁸。しかし『石庭』において「白い肌と蒼い目を誇りにする」、「温厚な平和主義者」という性格が与えられた彼は、

だが、あなたのおっしやる日本人というのは猿に過ぎないですな! 果実を盗み食いする木登り上手な猿といったところです。宗教をインド人から、芸術と文化を中国人と朝鮮人から、科学と組織を白人から盗みました。彼らが何を発明したというんです? 何もありませんよ。全て猿真似で

す。黄色いアメリカ人ですって？とんでもない。黄色い猿ですよ¹¹⁹！

と述べ、日本に上陸する前から人種差別的発言を含んだ最悪な雰囲気では話が展開するとともに、日本とヨーロッパの断絶が強調されている。

またカザンザキスが投影されたギリシア人の主人公の表象に関しても、「日本旅行記」に見られるようなアジア等東方に属する人間の要素を少しも含むことなく、『石庭』においては日本人のクゲを通して主人公が「憎むべき人種」(une race haïe)に属していること¹²⁰、そして中国人のリ・テからも「友よ、私は君をよく知っているんだよ。君は海賊で、略奪を働いている。正真正銘の白人だよ【un vrai Blanc】」と表現されている¹²¹。また主人公による自分自身に関する叙述でも、東京において日本の石庭を理解できるかと仏僧に問われた際に、この日本の石庭が理解できなかったことに対して「西洋人【occidental】としての私の皮膚は厚すぎた」と答えている¹²²。「日本旅行記」では主人公がギリシア人であることが描かれればしばしばギリシアの文物が登場したのとは異なり、『石庭』においては主人公がギリシア人として重要な位置付けを持つことはなく、もっぱら日本人や中国人といった黄色人種(race jaune)とは極めて異質な白人(race blanche)として表象されている。

ここまで見てきたように、ギリシア人に向けて書かれたわけではなくフランス語でヨーロッパ人に向けて書いた小説ではあるが、『石庭』の中で日中の文化について描写した箇所でも極東と古代ギリシア或いはギリシアとの共通性を探ろうとする姿勢は見られず、1936年に執筆された情勢や時代背景もあつてか白人と黄色人の融和的描写も見られず違いが強調されるのみである。「日本旅行記」では初めは極東に対し親近感を抱いていたのが最後には差異を意識するにいたった構成であった。だが「日本旅行記」の後に書かれた『石庭』では初めから差異が強調され、十八章で東洋の女性のとの邂逅を通して「女性性一般」を見出すことで「人種【les races】を引き裂いていた嫌悪感が消える。越えることのできない深淵の上に橋を架けることができる」と思い至るも¹²³、結局これは「東方」を理解し受け入れたのではなく「一般」を創り出しそこに逃避したのであり、日本人のヨシロと再会することもできなければ中国人のリ・テ、シウ・ラン兄妹とも和解することなく、日本や中国で出会った誰とも人格的な相互理解を経ずに終わってしまう。ここにアジアとヨーロッパの間に生まれ、非西欧的なものを探求するギリシア人・カザンザキスは見られず、オ

ックスフォードに学んだ¹²⁴、ヨーロッパ人・白人としての主人公・カザンザキスが見られるのみであり、極東とギリシア或いは自己を比定する際に「アジア・ヨーロッパ」という区分から「黄色人種・白色人種」という区分に移行していた。

5. 本稿のまとめ：「東方」から「西方」、そして「ギリシア」へ

前章でカザンザキスが日本やギリシアの民族や黄色人種や白色人種を言い表すのにフランス語で race、ギリシア語で *ράτσα* という言葉を民族と人種を区別せずに使用しているのを見た。しばしば *ράτσα* の代わりに *φυλή*(人種)や *έθνος*(国民)という言葉も用いられるが、カラリスは「カザンザキスの *ράτσα* は人種【*φυλή*】や血統を示すこともあれば、伝統や文化を示すことがある」と指摘しており¹²⁵、カザンザキスにおいては「民族」にあたる語の定義が曖昧であり、日本語でいう人種と民族の明確な区別がなされていない¹²⁶。

「日本旅行記」の中では *ράτσα* という言葉を通して民族という観点をもって古代ギリシアと日本の親近性が議論されてきたが、「日本旅行記」後半と『石庭』では同じ *ράτσα* という言葉でも白色人種・黄色人種という人種の観点为主题になり、極東とギリシアを含むヨーロッパの差異が強調される結果となった。そして日本旅行後に執筆された「ペロポネソス旅行記」、及び『イギリス旅行記』の中ではヨーロッパとしてのギリシアという主題の探求が見られるようになっていく。

本稿を通して、カザンザキスによる日本と古代ギリシアの文化比定を見た。第二章二節で確認したように、十九世紀以来知識人たちはギリシア観及び自己像形成の中で、ギリシアを西方・ヨーロッパ化させ東方或いはアジア的な要素を排除しようと努力していた一方で、カザンザキスは「日本旅行記」及び「ペロポネソス旅行記」の中で東方・アジアに属する日本文化との比定を交えながら古代ギリシア文化を描き出し、自身を悩ませていた過度の抽象性と個人主義といった西欧文明の問題点を乗り越えるべく思想を巡らしたことを論じた。ここでは、日本を巡る思索と古代ギリシアを巡る思索が交錯しあい相互に影響を与え合ったのであり、カザンザキスの古代ギリシアに対する思想或いは古代ギリシア像の形成に日本或いは極東での体験が多分に活かされているものだといえよう。

だが極東旅行の後には民族ではなく人種という観点で彼我の差異を実感し、西方、或いはヨーロッパの一部としてのギリシアの特質への探求に向かうこと

になる。そしてこの西方、或いはヨーロッパの一部としてのギリシアの特質として、本稿三章一節で列挙するにとどめた理性と肉体の調和、自由への愛、そして彼岸を求めず大地に根付くことの三つがある。これら三つの項目と日本或いは極東とのかかわりは本稿で議論の対象とならなかったが、これらを西方、或いはヨーロッパの一部として、ギリシアの特質の探求を進めた点については、稿を改めて論じたい。

参考文献

一次文献

- Δανηλίδης, Δημοσθένης (1985) *Η νεοελληνική κοινωνία και οικονομία*, Εκδόσεις Νέα Σύνορα - Α. Α. Λιβάνη, Αθήνα.
- Καζαντζάκης, Νίκος (1958) *Η αρρώστια του αιώνας*, Νέα Εστία, τεύχος, 740, Αθήνα, σελ. 691 - 696.
- Καζαντζάκης, Νίκος (2006) *Ταξιδεύοντας Ιαπωνία—Κίνα*, Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα.
- Καζαντζάκης, Νίκος (2007) *Ασκητική: Salvatores Dei*, Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα.
- Καζαντζάκης, Νίκος (2009) *Ταξιδεύοντας Αγγλία*, Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα.
- Καζαντζάκης, Νίκος (2011) *Ταξιδεύοντας: Ιταλία - Αίγυπτος - Σινά - Ιερουσαλήμ - Κύπρος - Ο Μοριάς*, Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα.
- Καζαντζάκη, Ελένη (1998) *Νίκος Καζαντζάκης ο Ασυμβίβαστος*, Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα.
- Πρεβελάκης, Παντελής (1984) *Τετρακόσια γράμματα του Καζαντζάκη στον Πρεβελάκη*, Εκδόσεις Ελένης Ν. Καζαντζάκη, Αθήνα.
- Φιλίμων, Ιωάννης (1860) *Δοκίμιον ιστορικών περί της Ελληνικής Επανάστασεως(τ. Γ)*, Τύποις Π. Σούτσα και Α. Κτενά, Αθήνα.
- Kazantzaki, Nikos (1959) *Le Jardin des Rochers*, Plon, Paris.
- Kazantzaki, Nikos (1962) *Toda - Raba Moscou a crié*, Plon, Paris.
- Kazantzaki, Nikos (1971) traduit par Princet, Liliane et Athanassiou, *Voyage : Chine - Japon*, Plon, Paris.
- Kazantzakis, Nikos (1963) traduit par Pappageotes George, *Japan China*, Simon and Schuster, New York.

- Hearn, Lafcadio (1903) *Glimpses of unfamiliar Japan, vol. I*, Kegan Paulm Trench, trubner and Co., London.
- Hegel, Georg.W.F. (1970) *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, in Werke in zwanzig Bänden 12*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.
- Lebesgue, Filiés (Démétrius Astériotis) (1928) *Lettres Néo - Grecques, à Mercure de France* (15 Dec. 1928), Paris, pp. 721 – 726.
- Lebesgue, Filiés (Démétrius Astériotis) (1930) *Lettres Néo - Grecques, à Mercure de France* (15 Avr. 1930), Paris, pp. 484 – 490.
- Nietzsche, Friedrich (1894a) *Menschliches, Allzumenschliches: Ein Buch für freie Geister (Erster Band)*, C. G. Naumann, Leipzig.
- Nietzsche, Friedrich (1894b) *Menschliches, Allzumenschliches: Ein Buch für freie Geister (Zweiter Band)*, C. G. Naumann, Leipzig.
- Nietzsche, Friedrich (1993) *Die Geburt der Tragödie*, Reclams Universal – Bibliothek, Stuttgart.
- Nitobe, Inazo (1909) *Bushido, the soul of Japan (16th edition)*, Teibi Publishing Company, Tokyo.
- Αριστοτέλης 著 牛田徳子 訳 (2001) 『政治学』 京都大学学術出版会 (Aristotle, Aristotelis Politica (1957) recognovit brevique adnotatione critica instruxit W. D. Ross, Oxonii, Oxford Classical Texts, Oxford.)

二次文献

- Ανεμογιάννης, Γιωργός (2007) *Νίκος Καζαντζάκης 1883 - 1957 Εικονογραφημένη Βιογραφία*, Μουσείο Ν. Καζαντζάκη, Αθήνα.
- Αργυροπούλου, Χριστίνα (2020) *Καζαντζακικά Μελετήματα - Νίκος Καζαντζάκης, ένας χαλκέντερος και πολύτροπος δημιουργός*, Εκδόσεις Έναστρον, Αθήνα.
- Καραλής, Βρασίδης (1994) *Ο Νίκος Καζαντζάκης και το Παλιμψήστο της ιστορίας*, Εκδόσεις Κανάκη, Αθήνα.
- Πάτσης, Μιχάλης (2013) *Καζαντζάκης και Ρωσία, οικοφοβία, διαλογικότητα, καρναβάλι*, Μιχάλης Πάτσης, Αθήνα.
- Πολίτης, Αλέξης (2009) *Ρομαντικά Χρονία Ιδεολογίες και Νοοτροπίες στην Ελλάδα του 1830 - 1880*, Εταιρεία Μελέτης νέου Ελληνικού Ανακρέοντος, Αθήνα.
- Σταματίου, Γιώργος (1997) *Η γυναίκα στη ζωή και στο έργο του Νίκου Καζαντζάκη*, Εκδόσεις Καστανιώτη, Αθήνα.

- Χολέβας, Ιωάννης (1993) Ο Μακεδονολάτρης Ίων Δραγούμης Ως Φιλόσοφος, Δημοσιολόγος, Οικονομολόγος και Κοινωνιολόγος, Εκδόσεις Πέλασγος, Αθήνα.
- Bien, Peter (2007) *Kazantzakis: Politics of the Spirit, vol.2*, Princeton University Press, Princeton.
- Bouchet, René (2020) *Nikos Kazantzaki Les racines et l'exil*, Éditions Universitaires de Dijon, Dijon.
- Janiaud - Lust, Colette (1970) *Nikos Kazantzaki sa vie, son oeuvre 1883 - 1957*, François Maspero, Paris.
- Terrades, Marc (2005) *Le Drame de l'Hellénisme - Ion Dragoumis (1878 - 1920) et la question nationale en Grèce au début de XXe siècle*, L'Harmattan, Paris.
- Vathrakogianni, Aikaterini (2011) *Women on Kazantzakis: Biography and Fiction: Reconstruction, Feminism and Misogyny*, LAP LAMBERT Academic Publishing, Saarbrücken.
- Zelevos, Ioannis (2001) *Rebetiko - Die Karriere einer Subkultur*, Romiosini Verlag, Köln.
- 今橋大樹 (2014) 「古典主義美学の誕生: ヴィンケルマンの美学に対する批判的検討」『法政大学大学院紀要』法政大学大学院、第七十三号、pp. 1 - 34.
- 庄司大亮 (2004) 「古代の言説とヨーロッパ・アイデンティティー-古代ギリシアにおける「他者」の言説-」『人文知の新たな総合に向けて: 21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」』京都大学大学院文学研究科 21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」編、京都大学大学院文学研究科 21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」、pp. 193 - 209.
- 島田了 (2009) 「ヴィンケルマンが目指したもの——『ギリシア美術模倣論』について」『言語と文化』愛知大学語学教育研究室、第二十号、pp. 69 - 88.
- 曾田長人 (2005) 『人文主義と国民形成』東京、知泉書館。
- 田邊正俊 (2013) 「文化をめぐるニーチェ—ニーチェの文化的パースペクティブについての一考察—」『立命館大学人文学科学研究所紀要』立命館大学人文学科学研究所、第百一号、pp.145 - 170.
- 福田耕佑 (2017) 「ニコス・カザンザキスの形而上学と正教神学試論——『禁欲』を中心に——」『東方キリスト教世界研究』東方キリスト教圏研究会、第一号、pp. 27 - 45.

- 福田耕佑 (2018) 「偉大な理想」の終焉とカザンザキスのギリシア性 — 独逸滞
在期(1921 - 1925)における動向を中心に —」 日本ギリシア語ギリシア文学
会、『プロピレア』第 24 号、pp. 19 - 31.
- 福田耕佑 (2019) 「カザンザキスと「東方」の探求 — ロシア旅行 とロシア文学
から受けた文学上の影響 —」 東方キリスト教世界研究、『東方キリスト
教世界研究』第 3 号、pp. 3 - 34.
- 福田耕佑 (2020) 「カザンザキス文学における日本描写 —— 「心」、「桜」、「富
士山」、「不動心」理解を中心に ——」 日本ギリシア語ギリシア文学会、
『プロピレア』第 26 号、pp. 1 - 24.
- 村田奈々子 (2013) 「近代ギリシアにおけるヘレニズム概念について」 法政大
学言語・文化研究センター編書『言語と文化』第 10 巻、pp. 181 - 205.

参考 URL

Loti, Pierre (1889) *Japoneries D' Automne*, Bibebook.

URL : [http://www.bibebook.com/files/ebook/libre/V2/loti_pierre_-
_japoneries_d_automme.pdf](http://www.bibebook.com/files/ebook/libre/V2/loti_pierre_-_japoneries_d_automme.pdf)(最終閲覧日 2020 年 3 月 22 日)

¹ 「日本旅行記」と記述しているが、本来は『日本と中国を旅して』という日本部と中国部の二部からなる書籍である。本稿では便宜的に『日本と中国を旅して』の日本部から引用する際には『日本と中国を旅して』ではなく「日本旅行記」と呼称する。

² 「ペロポニソス旅行記」と記しているが、本来は『イタリア、エジプト、シナイ、エルサレム、キプロス、そしてモリアスを旅して』という一冊の書籍である。そしてモリアスという呼称は現在では一般にギリシアで用いられておらず、より一般に用いられているペロポニソスを用い、本稿ではモリアス部の部分を「ペロポニソス旅行記」と呼称する。

³ Καζαντζάκη (1958 : 692)

⁴ 福田 (2017 : 19) et Καραλής (1994 : 68 et 74 - 75)

⁵ Καζαντζάκη (1998 : 83-84): 尚 1938 年にプレヴェラキスに宛てた手紙の中でも Mohammed - el - Cheitan - ben - Kazan というアラビア語風の名前を使用した(Πλεβελάκης 1984 : 472)。

⁶ Καζαντζάκης (2010 : 249 - 250)

⁷ Kazantzaki (1962 : 164)

⁸ 福田 (2019 : 25)

⁹ Lebesgue (1930 : 490) : 尚これに先行する 1928 年 12 月 5 日にもフィリア・ルベークによって同誌でカザンザキスに触れられている (Lebesgue 1928 : 726)。ただし 1928 年では劇作

品『ニキフォロス・フォカス』を書いたということが一段落の分量で紹介されただけであった。1930年においては、分量的には1928年より多少増えただけであるが、『ニキフォロス・フォカス』に先行する劇作品『キリスト』と『オデュッセウス』等の内容に踏み込んで「哲学的詩人」して紹介されており、フランスの読者に知られる重要な契機となった(Ανεμογιάννης 2007 : 58)。なお、最初にカザンザキスがフランスで紹介される契機を与えたのは、パナイト・イストラティが1928年7月にアンリ・バルビュスの『モンド』誌にカザンザキスを紹介する記事だとされている(Ανεμογιάννης 2007 : 48 - 52)。また本稿では、原文を引用して翻訳する際に、和文中に原文を表示する時は【】を用いて原文を表示する。

¹⁰ Καζαντζάκης (2006 : 32)

¹¹ 福田(2020 : 16)

¹² Πάτσης (2013 : 83)

¹³ Ιωάννης Κωλέττης (1773 - 1847) : アルーマニア系ギリシア人で首相経験を持つギリシアの政治家。1835年にはフランス大使に任命され、フランソワ・ギゾーらと交友があり、後に「フランス党」を結成する。

¹⁴ Terrades (2005 : 92 et 94)

¹⁵ Πολίτης (2009 : 90)

¹⁶ Zelepos (2001 : 30)

¹⁷ Πολίτης (2009 : 93)

¹⁸ Πολίτης (2009 : 93 - 94)

¹⁹ Ιωάννης Φιλήμων (1798/1799 - 1874) : フィリキ・エテリアとギリシア独立戦争を同時代の視点から描いた歴史家で、新聞『エオン』(Αιών)の編集者。代表作に『ギリシア革命に関する試論』全4巻(1860 - 1861)。

²⁰ Φιλήμων (1860 : λ'(50)) 及び村田 (2013 : 187)

²¹ Δραγούμης (1991 : 46)

²² 曾田 (2005 : 43)

²³ 島田 (2009 : 77)

²⁴ 今橋 (2014 : 7 - 8)

²⁵ 今橋 (2014 : 18)

²⁶ 曾田 (2005 : 75)

²⁷ 曾田 (2005 : 76)

²⁸ 曾田 (2005 : 75) : 尚、このような古代ギリシアの東方或いはオリエン特世界に対する優越意識は古代時代よりギリシア人たちに見られ、特に古代アテネ人たちはアテネ文化の高さと自分たちが野蛮人、或いはバルバロイたちと本性的に異なった存在だと自分たち自身を表象した(庄子 2004 : 199)。

²⁹ Nietzsche (1894a : 127)

³⁰ Nietzsche (1894a : 341 et 343) et 曾田(2005 : 354 - 356)

³¹ Nietzsche (1993 : 25)

³² Ibid. また『人間的、あまりに人間的な』下巻二百十五では、「近代的」(modern)という概念と「ヨーロッパ的」という概念がほぼ同一視される概念であり、地理的にヨーロッパに属するが故に「ヨーロッパ」なのではなく、ギリシア・ローマ古典とユダヤ・キリスト教にその共通の過去をもつ民族(Völker)と民族部分(Völkertheile)だけがヨーロッパの文化概念に含まれると述べている(Nietzsche 1894b : 307)。

³³ 田邊 (2013 : 161 - 162) et 曾田 (2005 : 362)

³⁴ 田邊 (2013 : 160); またヘーゲルも『歴史哲学講義』において「世界史」をゲルマン世界に繋がる西洋の歴史だとした上で、アジアの国々が世界史の繋がり(Zusammenhange)の外にあるとしている(Hegel, 1970, 278)。

³⁵ Βασίλειος Λαούρδας (1912 - 1971) : ギリシア学者。古代から現代に至るまでのギリシア研究を行った。著書に『カザンザキスのオディッシア』等が挙げられる。

³⁶ Καραλής (1994 : 208) et Bien (2007 : 175)

³⁷ Bien (2007 : 175 - 176)

³⁸ 福田 (2020 : 6)

³⁹ Πλεβελάκης (1984 : 385)

⁴⁰ Janiaud - Lust (1970 : 379) : 尚 1937 年にはビルソス社より 1932 年から 1933 年のスペイン体験の記録と内戦下のスペインでの体験を合わせ『スペイン旅行記』として出版されている。

⁴¹ Πλεβελάκης (1984 : 385) カザンザキスがどのような日程でペロポネソス半島を周遊したのかに関しては記録が残っていない(Janiaud - Lust 1970 : 383)。

⁴² Πλεβελάκης (1984 : 385)

⁴³ Πλεβελάκης (1984 : 469) : 尚 1961 年に『イタリア、エジプト、シナイ、エルサレム、キプロス、そしてモレアを旅して』が出版されている。

⁴⁴ Janiaud - Lust (1970 : 390) : この旅行は在アテネ英国大使シドニー・ウォーターロウ卿(Sir Sydney Waterlow)の仲介で実現している。

⁴⁵ Πλεβελάκης (1984 : 385)

⁴⁶ Καζαντζάκης (2006 : 150) και Αργυροπούλου (2020 : 223)

⁴⁷ Καζαντζάκης (2006 : 156)

⁴⁸ Καζαντζάκης (2006 : 150 - 151)

⁴⁹ 福田 (2020 : 9)

⁵⁰ Καζαντζάκης (2011 : 325 - 326)

⁵¹ Kazantzaki (1962: 107)

⁵² 福田 (2020 : 8)

⁵³ カザンザキスとも面識があったディモステニス・ダニイリディス(Δημοσθένης Δανηλίδης)はその著書『近現代ギリシアの社会と経済』(Η νεοελληνική κοινωνία και οικονομία / 1934)において、彼はカザンザキスとは反対に近現代ギリシアの基本を「精神

性」と「個性」そして「可塑的傾向」の三つだとしており(Δανηλιδης 1985 : 157)、近現代ギリシアには唯物的ではなく精神的な個人主義的性質があると論じている(Δανηλιδης 1985 : 174)。またヘーゲルは『歴史哲学講義』の中で古代ギリシアの時代に個人が形成されたと論じている(Hegel, 1970, 137 και 277)。

⁵⁴ Καζαντζάκης (2011 : 230 - 231)

⁵⁵ Καζαντζάκης (2011 : 246)

⁵⁶ Καζαντζάκης (2011 : 242)

⁵⁷ Καζαντζάκης (2011 : 246)

⁵⁸ Καζαντζάκης (2011 : 200)

⁵⁹ Καζαντζάκης (2009 : 65)

⁶⁰ Ibid.: 尚ここでは、「東方」という言葉に ανατολικός ではなく ανατολίτικος が使われている。前者の単語は「西・西方」に対して「東・東方」であるが、後者は主に小アジアや中近東を指す「東方」であり、所謂「東洋」や日本などの極東などは指さない。

⁶¹ Καραλής (1994 : 124)

⁶² Καζαντζάκης (2007 : 11)

⁶³ Καζαντζάκης (2006 : 82)

⁶⁴ ヘーゲルは『歴史哲学講義』の中で、世界史の中で古代ギリシア時代において個人が形成されたのだと述べたが、ギリシアには個人の自由意思に基づく共同精神があって「美しい自由の王国」が形成されており、個人が無邪気に共同体の目的に一体化しているとも論じている(Hegel, 1970, 137)。ここで言及されたヘーゲルの個人はカザンザキスの言う「自分自身」と近似したものであろう。

⁶⁵ プラトンはその著『エピノミス』において、ギリシア人が野蛮人(バルバロイ)から何を取り入れたとしても、結局はそれを見事なものに作り上げるのだと述べる古代アテネ人を描いており、文明の進歩という観点から多文化に対するギリシア文化の優位性を強く主張している(庄子 2004 : 201)。

⁶⁶ Περικλής Γιαννόπουλος (1869 - 1910) : ニーチェに影響を受けたギリシアの詩人であり、初期のカザンザキスの民衆語観とナショナリズム的な思想に大きな影響を与えたイオン・ドラグミスの友人であった。主著に純正語で書かれた『ギリシアの線・ギリシアの色』がある。

⁶⁷ Καζαντζάκης (2006 : 151)

⁶⁸ Χολέβας (1993 : 29)

⁶⁹ Καζαντζάκης (2011 : 215)

⁷⁰ Καζαντζάκης (2011 : 325)

⁷¹ Καζαντζάκης (2011 : 230)

⁷² Καραλής (1994 : 122)

⁷³ Hearn (1922 : 380)

⁷⁴ Καζαντζάκης (2006 : 151)

⁷⁵ Ibid.

⁷⁶ Καζαντζάκης (2006 : 84)

⁷⁷ Kazantzaki (1959 : 177)

⁷⁸ Kazantzaki (1959: 68)

⁷⁹ Καζαντζάκης (2006 : 150)

⁸⁰ 庭園に関しては『日本旅行記』「日本の庭園」の章を(Καζαντζάκης 2006 : 104 - 108)、また狩野派等の日本の美術に関しては同書「日本の美術【τέχνη】」の章を参照(Καζαντζάκης 2006 : 137 - 140)。

⁸¹ Loti (1889 : 121) : なおロティは、日本の日常品や手工芸(art industriel)に関しても高く評価している(Loti 1889 : 23)。

⁸² Καζαντζάκης (2006 : 84)

⁸³ Nitobe (1909 : 128)。またニーチェも『人間的、あまりに人間的な』上巻二百五十九の中で古典ギリシア文化が男性文化であると記述している(Nietzsche 1894a : 235)。

⁸⁴ 福田 (2019): 三章三節参照。

⁸⁵ Καζαντζάκης (2006 : 150)

⁸⁶ Καζαντζάκης (2006 : 93)

⁸⁷ Καζαντζάκης (2006 : 43 - 44)

⁸⁸ 福田 (2019): 三章二節一項参照

⁸⁹ Καζαντζάκης (2011 : 206 - 207)

⁹⁰ Hearn (1903 : 210)

⁹¹ カザンザキスの女性表象に特化して論じた書籍に Σταματίου (1997)や Vathrakogianni (2011)等が挙げられる。

⁹² カザンザキスに先行するロティも『秋の日本』(Japoneries d'automne)に吉原の描写が登場しており、基礎的な知識はこの本を中心に得たと考えられる(Loti 1889 : 159 - 163)。

⁹³ Καζαντζάκης (2006 : 142)

⁹⁴ Καζαντζάκης (2006 : 147)

⁹⁵ Καζαντζάκη (1958 : 693)

⁹⁶ Καζαντζάκης (2011 : 326)

⁹⁷ Kazantzaki (1959 : 176)

⁹⁸ 福田 (2020 : 9 - 10)

⁹⁹ Nitobe (1909 : 26)

¹⁰⁰ Nitobe (1909 : 86)

¹⁰¹ Ibid.

¹⁰² Καζαντζάκης (2006 : 151)

¹⁰³ Καζαντζάκης (2011 : 234)

¹⁰⁴ Ibid.

¹⁰⁵ 尚アリストテレスも『政治学』第一巻第五章において、自由人と奴隷がそれぞれその

本性によって自由人らしい体つきと奴隷らしい体つきをしていること(アリストテレス, 2001, 18)、そして同書第八卷第三章において当時読み書き、体育、音楽、図画の四科目の教育が重んじられ、特に体育は勇気の徳に貢献すると述べている(アリストテレス, 2001, 407)。

¹⁰⁶ Καζαντζάκης (2009 : 162)

¹⁰⁷ Καζαντζάκης (2009 : 138 - 139 et 154)

¹⁰⁸ Καζαντζάκης (2009 : 139): カザンザキスによると、鍛錬の基本的な法則は四つであり、(1)団体とは別に個人の肉体と魂を鍛えること、(2)自分の団体の中で個人として肉体と魂を鍛える、(3)相手の団体に応じて肉体と魂を鍛える、(4)相手の団体を見ながら、団体全体の中で肉体と魂を鍛える、としている (Καζαντζάκης 2009 : 140)。

¹⁰⁹ 福田 (2020 : 6 - 7)

¹¹⁰ Καζαντζάκης (2006 : 139): ここでの λογική に当たる語に仏訳では *logique* を(Kazantzaki 1971 : 155)、そして英訳では *logic* を当てている(Kazantzakis 1963 : 147)。

¹¹¹ Καζαντζάκης (2006 : 146)

¹¹² Πλεβελάκης (1984 : 459)

¹¹³ Πλεβελάκης (1984 : 460)

¹¹⁴ Kazantzaki (1959 : 16)

¹¹⁵ Kazantzaki (1959 : 93)

¹¹⁶ Kazantzaki (1959 : 217)

¹¹⁷ Kazantzaki (1959 : 15 - 16)

¹¹⁸ Kazantzaki (1959 : 46 - 47)

¹¹⁹ Kazantzaki (1959 : 16 - 17)

¹²⁰ Kazantzaki (1959 : 81)

¹²¹ Kazantzaki (1959 : 158)

¹²² Kazantzaki (1959 : 55)

¹²³ Kazantzaki (1959 : 125)

¹²⁴ Kazantzaki (1959 : 114)

¹²⁵ Καραλής (1994 : 43)

¹²⁶ Terrades (2005 : 212 - 213): カザンザキスに多大な影響を与えたイオン・ドラグミスにおいても、*La race* という言葉に対して相互に入れ替え可能なものとして *φυλή* と *γένος*、そして *ράτσα* の三つを用いている。*φυλή* という言葉は頻繁には用いられず、*ράτσα* は民族主義的な議論を構成する時に専ら用いられる語であり、この二語は生物学的な意味合いも与えられている。しかしドラグミスにおいても厳密な定義に基づいた使い分けがなされているわけではない。

**Η γενική εικόνα περί ελληνισμού του Ν. Καζαντζάκη
δομημένη από τη σύγκριση
μεταξύ της αρχαίας Ελλάδος και της παραδοσιακής Ιαπωνίας:
μέσω της ανάλυσης του "Ταξιδεύοντας: Ιαπωνία"
και του "Ταξιδεύοντας: Μορέας"**

Kosuke FUKUDA

Αυτό το άρθρο προσπαθεί να αναζητήσει εάν οι στοχασμοί του Ν. Καζαντζάκη για την αρχαία Ελλάδα και για την παραδοσιακή Ιαπωνία αλληλοεπηρεάστηκαν μερικώς στα έργα του "Ταξιδεύοντας: Ιαπωνία " και του "Ταξιδεύοντας: Μορέας" μέσω της εμπειρίας του στην Ιαπωνία (1936) και της συγγραφής του για τα ιαπωνικά (1936-1937), ιδιαίτερα για να δομήσει την εικόνα της αρχαίας Ελλάδας.

Θέτοντας σε τάξη το ιστορικό συμφραζόμενο σκοπεύει το άρθρο αυτό να επισημάνει τη σημασία και τη σημαντικότητα που έχει η προσπάθεια του Καζαντζάκη μέσα από τα έργα του να συγκρίνει την αρχαία Ελλάδα και την Ιαπωνία και επίσης δείχνει τη θέση της καζαντζακικοποιημένης Ιαπωνίας στο ερώτημα: "η Ελλάδα είναι Δύση ή Ανατολή ή άλλο και ποιος είναι ο χαρακτήρας της Δύσης και της Ανατολής;"